

## 事例 7 : 車椅子ベルト、ベッド柵

### 対象者の状況

- ⇒ 95歳、女性 要介護度4、寝たきり度C2、認知症高齢者の日常生活自立度
- ⇒ 左右大腿部の骨折があり、家族から強く拘束の希望があった。

### 身体拘束の状況

以前に左右の大腿骨を骨折されたことがあり、歩行が非常に不安定な状態となったため、離床時は車椅子安全ベルトを使用、着床時にはベッドの四点柵をさらにひもで固定し、降りられないようにしていた。

再び骨折をするようなことがないよう、車椅子ベルトやベッド柵の使用について、家族からも強い希望があった。

### 対応方法の検討

御家族が強く拘束を望まれていたため、施設側として、できる限り拘束をなくしていきたいことを説明し、御家族にケアカンファレンスに参加してもらうこととした。

御家族は、けがや骨折により入院となることを非常に心配しておられたため、身体拘束を廃止した上で、安全性を重視したケアプランを作成することで納得され、理解を得られた。

### 対 応

車椅子から立ち上がり、歩行することが多かったため、どこにでも手をつくことができるような環境を整え、その上で、拘束をはずすこととした。

まず、低床ベッドを導入し、就寝時には緩衝マットを敷くこととした。

また、居室内の配置換えをし、ベッドを室内の中心に置いて、手をついてのつたい歩きがしやすいような工夫をした。

拘束を外してから6ヶ月程度は巡回を強化して様子を見た。特に最初の3ヶ月ほどは30分ごとに巡回するなど、安全管理を重点的に実施し、声かけを頻回に行うなど、なるべく自由にすごせるように配慮した。

### 経 過

自由がきくようになり、ポータブルトイレも使用できるようになった。

大半の時間、居室で好きなように過ごしておられ、帰宅願望もへり、表情もよくなっている。

拘束を廃止した当初は、職員も危険が大きく不安な気持ちが強かったが、現在では状態も安定しておられ、安心できる状態となっている。

## 【着眼点（ポイント）】

本人にとって暮らしやすく、また、危険性を少しでも軽減しながら自由に過ごせるような生活空間の環境を整えることが、身体拘束廃止に結びついた事例